

〔調査報告〕

## 鬼師の世界

——黒地：丸市，（杉荘），萩原製陶所（2）——

The World of Ogre-Tile Makers

—“Kuroji” as Fired Tiles: Maruichi, (Sugiso), and Hagiwara-seitojo (2)—

高原 隆

TAKAHARA Takashi

愛知大学国際コミュニケーション学部

*Faculty of International Communication, Aichi University*

*E-mail: nawa@aichi-u.ac.jp*

### Abstract

Hagiwara-seitojo is unique among ogre-tile makers in Takahama. First, the origin of Hagiwara-seitojo is not ogre-tile makers but an earthen pipe maker. There existed about thirty factories of earthen pipes in the golden age in the town. However, after World War II the industry became declining. The reason was because alternative pipes were developed. They were vinyl pipes and concrete pipes. The result was dramatic. The earthen pipe industry itself disappeared from Takahama around the year of 1965. Hagiwara-seitojo could not help changing the job. As a result, the new job was an ogre-tile making. In this paper I depicted both the age of an earthen pipe maker and that of an ogre-tile maker. In the age of an ogre-tile maker Hagiwara-seitojo has two periods. One is the age of making by press machine and that of making by hand. In this section I focus on the age of press by machine.

旧(株)丸市こと丸市鬼瓦工場は高浜でも有数の手作りの鬼板屋であった。最盛期は7, 8人の職人を抱え様々な鬼瓦が多数の職人の手によって次々と作られていた。在庫の品数が豊富で「鬼屋の百貨店」と言われ、「丸市行きゃー、何でもある」といわれるほどの勢いのある鬼板屋であった。その丸市鬼瓦工場から独立した職人の一人が杉浦五一である。「杉荘」という白地屋になったのである。この杉浦五一がこれから話す萩原製陶所と密接な関係を持ち、ここに丸市鬼瓦工場の新しい系統樹が芽を吹いたのである。他の鬼板屋と違い、萩原製陶所ははっきりと1) 土管屋の時代と2) 鬼板屋の時代という、まったく異

なる二つの時代を形成している。さらにその鬼板屋の時代はプレス製の鬼板屋と手作りの鬼板屋とを併せ持つユニークな存在である。いわゆる伝統的な鬼板屋とは違う独特な気風を持つ新興の鬼板屋といえる。

## 萩原製陶所

### 1) 土管屋の時代

杉浦五一との浅からぬ縁で、萩原製陶所は第4グループの中の小系統樹である丸市鬼瓦工場の加藤晴一系に入る。しかし厳密に言えば、加藤晴一は「鬼吉」の小僧として入り、其処の職人から独立し、新しく鬼板屋を興したので、市古吉太郎系という事になる。このように系統樹はフラクタル構造になっており、基になる幹から似たような形の若い枝をスツ、スツと伸ばしていく。市古吉太郎系の元も当然あるはずであるが、現在のところは判明していない。理由は鬼吉が途絶えているからである。つまり、市古吉太郎系は大本の鬼板屋が無くなり、其処から別れ出た枝が幹になり、丸市系となっているのであった。

さて「萩原製陶所」であるが、これまで見てきた鬼板屋の屋号とかなり違っている。名は体を表すというが、その由来を見ていくことにより萩原製陶所の姿が現れてくる。萩原製陶所はもともと鬼板屋ではなく、土管屋であった。明治の頃、常滑から萩原栄太郎と伊藤田平という人が高浜へ来て、土管をつくるために傾斜のある土地を探したという。当時は登り窯なので傾斜のある場所が必要だった。結局、すでに先に来ていたカネマルという土管屋の隣に土地を手に入れ、土管を製造し始めた。この場所を後に、「土管坂」と言い、その会社の名前を「日本陶管」といった。栄太郎の孫に当たる萩原明は栄太郎について次のように語っている。

肩書きは社長じゃないと思いますよ。専務か常務か、そのあたりだと思いますがねえ。昔のことだから、そりゃ、まあ、死ぬまで（昭和20年没）やっていましたね。ここで。

つまり明は祖父栄太郎を明が20歳の頃まで直接知っており、一緒に生活をともにしているのである。それ故、明の栄太郎についての話にはリアリティーがある。

それがまあ儲けてねえ。今の田んぼや何かはあちこち買ってさあ。栄太郎さんが。ほいで小作人やらしてさあ。そいでまあ、裕福にやってたですなえ。ほんで、まあ、やる仕事は芸者買いしかやらなかったからねえ。そう、日本陶管ってのも、まあ、このあたりじゃ一番大きかったからねえ。あの、土管屋としては。だから、120いたで

しょう、その当時に。あのお、工員さんがねえ。だから高浜で日本陶管知らん人無いぐらいねえ。「ほい一番、土管坂」ってのもそっから来たぐらいだから。明治から大正にかけては盛大だったですよねえ。一番大きかったじゃないですか、このあたりでは。会社としても。

明の言葉によると、栄太郎は「それこそ、毎日、毎日が招待、招待、接待、接待で明け暮れた人じゃないすかねえ。夜になると酒飲まにゃ、毎日酒飲まにゃきゃいかん人だったですよ。一日も止めなかった人ですよ、酒は」といった様子だったらしい。ところが、家の中では家計はしっかりと栄太郎が管理していたのである。

徹底して几帳面な人だったでね。「これは新聞代」、「これは電気代」、「これは電話代」って言ってねえ。全部分けて袋入ってね。電話料と書いてねえ、其処へ入れてさあ。これ新聞代とか、米代とかね。色々そのお、書く。そういう風に自分の金庫が在ってねえ。ピーーンと音がする。だからまあ、皆さんようゆうけどねえ、集金に來てもねえ、一遍奥まで行かなきゃなあ。そこで目の前に金があってもねえ、出してくれなかった。お祖父さんがなあ、ほんなん、十銭とか十五銭でも、目の前に転がってんの、出してくれりゃいいと思うけどねえ。それ出さない。遠くまで行って金庫開けてねえ、ほっから袋持って来てさあ。ほっで払ってやった。それぐらいねえ、お金の面ではねえ、几帳面な人だったですよ。

だからそりゃ、毎日、あんた、毎日見て、家計簿をねえ、計算するぐらいだもんねえ。全部やってみて、合わんと、それ買ったやつが、怒られちゃう。ほいでまあ、肉でも余計買って来ちゃ、怒られたりねえ。おばあさんは、おばあさんで、「こんなに使ってどうするだあ」ってゆって、怒られたりねえ。まっ、特に僕は、まあ、しょっちゅうねえ、小遣い三銭使うと怒られたけどねえ。二銭まではねえ、「明、小遣い二銭」と、「一銭」と書いて。「明、小遣い一銭」。ほいで二銭まではねえ、何んとも言わなかった。「三銭」と書くとねえ、「お前一日に三銭も使ってどうするだ」って訳だな。「正月や盆になあ、五銭しかもらんなあねえ時代になあ、お前一日に三銭も使ってどうするだあ」って。その頃、実際そうだった。盆や正月にねえ、五銭だったですよ。十銭貰える時には大旦那衆の子だったねえ、盆や正月に。それが毎日、毎日ねえ、その、三銭使っただけだからねえ。で、三銭使うと怒られた。

明のこの話からも、当時の萩原家の裕福な生活振りが伝わってくる。栄太郎は日本陶管では、幹部として大盤振る舞いの生活をし、家庭では財布の口をしっかりと締めていたので

ある。公私をはっきりと分けていたのだ。それ故に、萩原家は確実に富を蓄えていった。栄太郎は常滑から高浜への新参者にもかかわらず、次々と田畑を買占め、地主となっていた。栄太郎はさらにもうひとつ新しい事業を興した。それが萩原製陶所である。栄太郎本人は日本陶管に死ぬまで勤めていたのであるが、跡取りの息子と、さらに自分の娘に伊藤家から清市という養子をもらい、萩原製陶所を始めたのである。栄太郎は萩原製陶所に必要な資金や人材は提供したものと思われるが、現実に会社を運営したのは息子と娘婿であった。ところが跡取りの息子が戦死してしまい、娘婿の萩原清市（明治29年生まれ～昭和43年没）が実質初代萩原製陶所となったのである。そして正式な工場の名前は④萩原製陶所であった。明は次のように言っている。

④（マルハと読む）萩原製陶所ってのが、親父（萩原清市）の作った名前ですよ。え。で、僕は、今はまあ④はどっか行っちゃったけど。ただ、萩原製陶所そのまま。だから何か可笑しいよね。鬼瓦で「製陶所」って、余り無いでしょうけど。まっ、土管屋時代のね、そのまま延長で、そのまま、来とるですよ。

初代萩原製陶所である萩原清市はかなり風変わりな人であった。最も今から思えば、その風変わりなところが当時の土管屋の栄華を象徴していたという事も出来る。事実その栄華無しにはできない暮しである。

親父はねえ、そうだねえ、僕にはいい親父だけど、どうなんだろうねえ、ありゃ。割りに気取ってましたね、ありゃあ。

「近衛公」って言われた位だからねえ、<sup>うち</sup>家の親父は。高浜では近衛公というぐらい。あの一、大臣のねえ、総理大臣の近衛公爵。あのぐらいの品のあった人って事でしょうね。きつと。いつも着物着てねえ。

まあ、こういう格好（仕事着）した事は無いでしょう。おそらく一回も。うん、馬鹿みたいな格好したこと、まず無いですね。いつも着物着て。で、ちゃんと朝から火鉢へ火入れてねえ、夏でも。で、こうお茶入れてさ、飲んでてねえ。まあ、お抹茶<sup>た</sup>点<sup>て</sup>て、羊羹<sup>ようかん</sup>食べて。だからそりゃ、あの一、貴公子でしょうねえ。「近衛公」と言われてもしょうがないと思うよ。誰が来てもちゃんとね、お茶出して。夏でもですよ。夏でもこんな格好したこと、いっぺんも無いでしょう、おそらく。いつも着物着てたねえ。着物着て正座してましたよ。いつ誰が来ても。一日中正座してたんじゃないかなあ、あの人は。

そして凄いののは次の明の言葉である。明の話から最盛期の土管屋がどういったものだったのかが分かるのである。

あの人も芸者買いが専門だったですからね。お客さんの接待だけでね。で、東京へ集金に行つて。それが仕事だったでね。月に一遍は東京に出張に。三日ぐらいね。あの、お得意さん回つてね、金集めたり。それが仕事だったですよ。ほいで、<sup>うち</sup>家に居る時は、工場はねえ、任せた。あの、工場長に任してねえ。自分が工場に入ったって事は、まあ無いでしょう。僕らたまに手伝つたけどねえ、親父はやってないやねえ。土管のつくり方も知らんじゃないんですか、あの人は。うーん。お羽織着て、着物着てねえ、お茶飲んでたつてのが、あの人の養子に来てからのじゃないっすかねえ。仕事したつて事、僕見たことも無いもんねえ。

こういった生活が出来たのは土管業の利鞘が良かったからである。明は次のように語っている。

土管屋つてもねえ、大正から昭和の初期は良かったんじゃないんすかね。昭和の10年位までがきつとねえ、全盛だと思ふよ。あの、儲かつたつてゆうねえ。3割であつたつてゆうかねえ。材料と人件費で。あと7割が戴きだつたつていう。

毎日ぐらいねえ、お得意さんが次から次に来るからね。それらを接待するつて形でさあ。晩飯を料理屋行つてドンちゃん騒ぎで飲まして、芸者上げてねえ。その挙句、その芸者抱かして寝かせてさあ、で、明るる朝帰つてつくつてゆうねえ。そうゆうのは昭和十年位の時は、そんな事ですよ。毎日が。だから高浜の土管屋の大將つてみんなそうじゃないっすか。ほとんど家でご飯食べた人居らんじゃないっすかねえ。

だから、そうゆう時代もあつたですな。戦争が始まる前まではね。

こういった状況で、土管屋は戦前は活気に溢れており、高浜からその近郊にかけて30軒近くも土管屋があつたという。しかも工場の規模が大きいのが特徴であつた。一方の瓦屋は夫婦単位で小規模に大抵やつており、ある意味、土管屋と同業種といつてもいい間柄なので、独特な差異化や差別化が土管屋から瓦屋に対してなされてた。

昔は土管屋さんつてゆうのは割合に、あの、平均に土管屋さんつて大きかつたですかんね。あの、何ていうのか、瓦屋さんはねえ、ほんとへぼくてね。夫婦、子供ぐらい

でやってたものが多いですよ。土管屋っていうのは大体10何人ぐらいはね、最低でも15人ぐらいは、使用人が居ってね。それやらしててね。それから、自分のうちの社長さんは、大将は、殆んどやってないわね。仕事やってない人多かったですね。もっともやった人も居るけどね。

そういう事で、あの、土管屋と金持ちは、瓦屋、馬鹿にしたしね。もう、「瓦屋のホチが」ってゆう風なね。「ホチ、ホチ」って。あの、「ホチ」って言葉よく使ってたですね。

「ホチ」といっても初めて聴く言葉でその時は言っている事が分からず、明に「ホチってどういう意味ですか」と聞き返した。

ホチって言うとね、あの、瓦、ほら、手が真っ黒になるっしょう。その手、こう触るからね。こう、顔まで黒くなっちゃうですね。目だけが触らんからね。目がこう白いでしょう。これに顔が真っ黒。目だけ、ホチ、ホチって、こう、パチパチ目が開くからね。ほいで、それを、どういう時か、パチがホチになるかね。「瓦屋のホチが」ってゆってね。で、馬鹿にした。

まあ、一格も二格も下げたね。「なんだあ、瓦屋のホチが」ってゆってね。土管屋からゆうとそうゆう感じでね。「お前も瓦屋のホチか」ってゆってね。で、そうゆう風にあったもんですね、結局。特に瓦屋に勤めた人はね、もう、あのう、コンマ以下に。そんな感じですね。

「ホチ」という言葉は当時の瓦屋の土窯による製造の様子を的確に表しており、さらに瓦屋の社会的位置をも示していたのである。ところが現代は、「ホチ」という言葉そのものが消え、瓦屋は土窯からトンネル窯の時代に入り、さらに何んと「ホチ」を連発していた土管屋さえも消えているのであった。

このように萩原製陶所は戦前は瓦屋ではなく、全くの土管屋であった。しかも、「ホチ」と言う事の出来る土管屋であった。ところが戦後になり、その萩原製陶所が「ホチ」へと転業していくのである。その話に移る前に、戦時中（大東亜戦争）の事についてまず言及しようと思う。高浜の瓦屋は戦時中は日本中で建物の需要が限りなくゼロに近くなり、軒並み、閉鎖かそれに近い状態になった事はこれまでの数々のインタビューから分かっている。ところが、土管屋は戦前の様な事は出来なくなったものの、国から軍需工場に指定さ

れ、物資の不足が恒常的だった一般の生活からすると、とても豊かな暮らしだったことが明  
の話から分かるのである。

戦時中はまた逆にねえ、あの、暗渠排水とかいってねえ、土管は。あの、田んぼに二  
毛作するんでね、田んぼに植えてねえ、水引いて、ほいで、米を。水取っちゃって、  
麦作って。暗渠排水でね、軍需工場だったすよ。一応名目上は。

だから色々な物が配給来たですよ。他所には来んような塩とかねえ、ほいから油と  
かねえ、そうゆうもんが。あの、手袋とかねえ、ほっから地下足袋なんか無かったの  
かねえ、組合を通じてねえ。軍需工場だから、あの、結構ねえ、割合上手に回って来  
たです。ええ。だから、塩なんかも無い頃にどどん来たからねえ。塩はもつと  
も焚くからねえ。あの、塩焼き、塩焼き窯で、窯で焚くから。だからくれた。あの、  
岩塩ですけどねえ。味噌作るに困るでしょう。家は、まあ、大豆は無いけどさあ、塩  
はまあ山ほど持ってるもん。(笑い) 岩塩とねえ、交換でねえ、確か二升、二升到一  
升位じゃなかったけねえ。二升位の大豆でねえ、一升の塩やってね。百姓はまあ、よ  
く換えたこと覚えがあるです。ええ。

戦争中はねえ、土管屋は平均、瓦屋は駄目だったけど、土管屋は良かったんじゃない  
んですか。みんなそれぞれねえ、そういう配給があつて、自転車のチューブだとかね  
え、そんなもんまで配給があつたですからねえ。無かつたですよ。タイヤの、リヤ  
カーのタイヤだとかねえ。自転車の、あの、ホイールも無かつたし、ああゆうもんが  
ねえ、来たです。ええ。戦争中、配給で。

この羽振りの良かった土管屋が戦後、次々と姿を消していったのである。戦時中は国か  
ら特別優遇さえも受けていた産業である。萩原製陶所はその荒波に飲み込まれていった。  
明は次のようにその大変動について語ってくれた。

ぼくは生まれたのは、ここ、地元のここなんだけど。あの、昔でいうと<sup>だんどめ</sup>段留という  
所だけども、今は青木町になっちゃったけど。そこで生まれたんだけど。あの、生  
まれた時はねえ、えらい地主でねえ、大地主だったから。それこそ大事な子にして  
もらって。あれだね、秋になると、もう、百姓が持って来た収穫でねえ、庭が米で一  
杯に成る様な、そんな生活でね。だから小作人が沢山いたという事です。ええ。

40町歩位、多分在ったですよ。ええ。だから、あの、片山内閣になってからね、いっ

ぺんに農地改革になって、そいで一晩のうちに貧乏になったですよ。それまでは裕福だったですよ、家は。

まあ、所謂、その、地主さんって事ですかね。そうゆう事だね。で、まあ、秋になるといつも牛車や何かでね、百姓が引っ張って来て。米蔵が一杯になってまだ入らんで、庭に俵で並べてね。それで子供の頃は、もう、俵の上で遊んだじゃんね。

明から見ると祖父に当たる栄太郎が、常滑から高浜に渡って来て日本陶管へ幹部として入り、自ら稼いだお金を田地に投資して行って築いた資産である。ところが戦後の農地改革に引っ掛かり、一夜にしてその資産が消えたのである。

片山内閣のときにね、完全に、まあ、家も貧乏になったって事だね。農地改革で、まあ、取られてね。だから、まあ、実際、家で作っている、自家で耕作しているのは無かったからね。あれが残っていればねえ、自分のやつだけ残るだろうけど。全然やってないからね。全部、あの一、小作に任したからね。やらしてたからね。だから、まあ、何にも無いんすね。やれるの全部取られたって訳じゃなく、あれは買ってくれたんだろうけどね。二束三文で売っちゃった格好だね。それから、だから片山内閣嫌いですよ。

不幸はこれだけに止まらなかった。主だった資産が戦後すぐ無くなり、さらに追いかけるようにその資産を成した源である土管産業自体がやがて消えていったのであった。

萩原明は大正14年6月23日に生まれている。萩原製陶所の二代目である。明は戦前の豊かな萩原製陶所を過ごし、昭和16年に東京にある武蔵野無線学校へ行き、通信士になろうとした。電気関係の分野が好きだったという。しかし、昭和19年に高浜に戻り、萩原製陶所に入るのである。ところが明が20歳になると軍の召集令状が届き兵隊に出で行った。当時、日本はすでに外地に行く船舶も無く、浜松で入隊し、宇都宮で終戦を迎えている。幸いにして外地には送られなかった。(第1図参照)

終戦ですね。そいで、僕なんか大分いたですけどね。みんな帰して、18人ぐらい残されてね。そいで、機材は一箇所集めてさあ。そのもり守る人たちだけで。僕は11月まで残されたでね、あそこに。機材の守りですね。ピストルだとか、砲弾とかねえ。そいから飛行機の、飛行機の、十何台ってありましたね、まだ。まあ良いのは無かったけどね。それもなんか「アメ公が最良の状態だねえ、申し受ける」って言うも





第1図  
第二代 萩原明  
萩原製陶所工場前にて

んだねえ。たまにはエンジン掛けてねえ、そいでやとったですよ、馬鹿みたい  
に。で、来たら何の事は無いね。洋剣持って来て、ポカンポカン割りやがってね。頭<sup>あつたま</sup>  
来ちゃってさあ。

そして明は昭和20年11月に高浜にある萩原製陶所へ無事戻って来た。明は当時の製陶所  
の様子をこう語っている。

あの頃はねえ、昭和21年、22年、23年頃になってからでも、団子汁出しちゃうと喜  
んどったねえ、職人がねえ。自分の食べるもん無いからねえ。金貰ったって買えない  
からねえ。闇でしか無いから。あのお「残業する」ってゆって、「残業やれ」、「残業  
やれ」って言って。そりゃ自分たちが食べたいからね。自分の職人さんたちも、「大  
将、残業やってくりよ」ってゆって、しよっちゅうゆってましたねえ。ほうと、も  
う、水団<sup>ずいどん</sup>とか、かぼちゃの汁とかねえ、そういったもん夜出してやるからねえ、残業  
やれば。それが食べたくてさあ。だから「残業やろ」、「残業やろ」ってねえ、しよっ  
ちゅう言ってましたけどねえ。まっ、そのくらい、みんなお金が有っても食べる物が  
無かったですね。

ところが土管屋自体はすでにその頃から、経営が末期状態に入っていたのである。

もう売れなかったですね、その頃すでに。もう、いや、ほんとですよ。土管の山。今  
の瓦屋、どこでも在るでしょ、山が。あーゆう感じ。土管が山になって。

で、まあ、親父は、まあ、そのうち、まあ、昔のあれがあるからねえ、大正の、明治の人だからねえ。まあ、「そのうちになんやあ、そんなもん、そのうち売れるようになるで、まあ、積んどきゃいいが」って。そいで銀行から借金してねえ。

ほいで「親父、まあ、こんだけ積んどってなあ、作っても売れへんで。止めるわけにはいかんしさあ」。そう言ったら、「まっ良いよ、良いよ」。なかなかそこねえ、三年や四年ねえ頑張ったですなえ。親父が死ぬまで。死ぬちょっと二年、三年ぐらい。「まあ、親父いよいよ駄目だでねえ、まあ、俺が切り替えるで」ってねえ。「これ止めて、土管屋やめて鬼瓦を作るでなあ」。「そんな事は簡単に出来るかや」ってゆうもんでねえ。「そりゃ、あのお、プレスとあれさえありゃ出来るでねえ、そいで切り替えちゃうで」ってね。その切り替えるまでが一難儀だったですなえ。説得するのに。

萩原製陶所は戦前お得意さんがそれこそ途切れることは無いほど栄えていた。ところが、当時、清市が月に一度は東京へ集金に出張していたように、得意先が殆んど東京に集中していた。そして、戦時中に東京が空襲で焼け野原になり、得意先自体が焼け出されてしまい、大切な売り先を一気に失ってしまったのである。これが直接の原因で土管の山になって、土管は行き場を失ったのであった。そうこうしている裡に、土管に代わる製品が戦後暫くして現れた。それが「ビニールパイプ」と「ヒューム管」だったのである。

戦後、ビニールパイプっていつ頃出来たのかなあ。まあ、ビニールパイプってゆうのは兎も角、あれですね、我々の敵ですねえ。極端に悪くなってたからねえ。ヒューム管のほうは、あのお、あれですねえ、下水とかだからねえ、今でも名古屋市なんか使ってるんじゃないんですか、土管を。あの酸に強いから。普通のコンクリートじゃねえ。コンクリ管じゃねえ、溶けちゃうですねえ。確か使ってると思います。現在でも。土管の本管ってゆうのかねえ。その流れる所はねえ、土管使ってる筈ですよ。

明が分析するに、(1) コスト、(2) 土管は長いものが作れないこと、(3) 重量がある、という点でコンクリート管よりも、特にビニールパイプに土管が完全に負けたと言っている。その結果、刈谷から碧南にかけて30軒近くあった土管屋が急速に消えて行き、1軒も無くなってしまったのである。そして土管屋の組合も同時に無くなったのである。

## 2) 鬼板屋の時代

萩原製陶所は以上のような事情で土管屋から鬼板屋に移った。昭和40年頃の出来事で

ある。萩原清市は昭和43年(1968)に亡くなっている。土管屋から鬼板屋への大転換は二代目の明が行なった事が分かる。世代交代が奇しくも転業という人生の一大転機と重なったといえよう。ただ明にとっては心理的にそれほど大きな変化ではなかったのである。

まっ、この辺はねえ、みんなやっぱり、あれですね。あのお、高浜に生まれた人は、やっば、泥食べてるからねえ。「粘土食べなきゃ生きてかれん」ってのが多いですねえ。

一番手っ取り早いっすよ。今まで土管で、粘土でしょう。それからこんだ同じにねえ。変った物、鉄でやるったら大変だもんねえ、これ。泥を触ったのが鉄をやるっつたらねえ、頭も無いしさあ。だけど泥なら泥同士だかんねえ。だから、土管作ったのが鬼瓦作るってゆう。同じ粘土だからねえ。そうゆう点では安易にいけるんじゃないんですか。気楽にねえ。

明の言葉は三州に独特な土の文化が根付いていることを示唆している。「粘土食べなきゃ生きてかれん」とずばり表現している。土地の人は別に可笑しくはなく、当たり前のことなのかもしれないが、他の土地の人はおそらく驚き、少し違和感を感じさせる何かをこの言葉は持っている。明たちは粘土と共生する人々なのである。事実、土管、瓦、鬼瓦、焼き物、土人形といったものは互換性を持ち、この地域では良く見かける文物である。

転機の直接の原因は目の前の土管の山と借金の山であった。これが無ければ転業は当然起こるはずも無かった。清市や明が経営に困っていた丁度その頃、鬼瓦の世界に大変革が起きていたのである。鬼瓦はそれまでは、短くとも最低10年の修行を伝統ある鬼板屋でして、初めて身に付けることの出来る技術であった。ところがプレス機械が開発され、何と僅か一日で鬼瓦が作れる技術が丁度昭和40年頃に三州で確立され始めていたのである。ところが幾ら大量に簡単に鬼瓦が出来ても、その製品が土管の山のような元も子もない。そういった機械が開発されていった背景には戦後焼け野原になった日本の至る所に家が建ち始めたことがある。そして追いつけないほどの瓦の注文が日本の各地から瓦の産地を襲ったのであった。

明は当時、土管の山と借金の山を見て暮らしていた。同じ町の瓦屋に対しては長い間、「ホチ」としてしか考えず、瓦の世界が地殻変動を起していることはほとんど知らなかった。其処へ、ニュースが明のもとへ飛び込んで来たのであった。

かみ いわかく  
上の岩角さんってのがおるがねえ。今、ヤオハンのオーナーになってますがねえ。ヤオハン潰れちゃったけどねえ。その人がねえ、僕の学校時代の連れですけど、一級下だ

けどねえ。その人は東大出だけどねえ、それが「やい、今60本（トンネル窯）やっ  
とるけど、来年120本これになるぞ」っと。ほいで、「現在60本でも鬼瓦が足らん」  
と。ほいで、僕にねえ、「おい、120本って倍ぐらい出来るでね、ほんだで鬼瓦やっ  
ちやどうだと。土管がそげん駄目ならねえ、鬼瓦造る気ないか」ってゆって。そんな  
事が切っ掛けですよ。

この岩角という人は子供の頃からの明の友人で、中学校（刈谷中学校）のときは一年下  
で、いつも遊びに来ていたという。明はその岩角と明の話を分かりやすく「土管屋とホ  
チ」の話に譬えて語ってくれた。

俺、いつもこぼしたですよ。駄目だこんなん、土管屋がいよいよ駄目でなあ。  
瓦屋はいいなあ」ってゆってねえ。そのころ、彼、トンネル窯やってましたからね  
え。だからまあ、「ホチが偉くなってねえ、この頃は。まあ、お前らが社長さんにな  
ってなあ。土管屋は、まあ、乞食だが」ってゆったねえ。そんな事ゆって。ホ  
チが逆転して、で、ホチが偉くなってねえ。社長なってさあ。こっちはもう、今まで  
えばったの罰<sup>ばち</sup>が当たってねえ。今度は乞食ですよ。山んなっちゃって。

当時、トンネル窯を経営していた旧友の確かな情報とアドバイスを切っ掛けに、明は世  
交代代と合わせて萩原製陶所を土管屋から鬼瓦屋へ転換したのである。鬼瓦を昔ながらの  
手作りで作るのなら、この転換は不可能であったろう。しかし、プレス機械で鬼瓦を造る  
技術が既に丁度この頃、完成していた。明は転換を決めると僅か一日だけ近くの鬼瓦のプ  
レス工場へ行って見学し、機械を導入し鬼瓦を造り始めているのである。

矢野さん（矢野鬼瓦）ってとこねえ。「其処行けばやってるで、見といで」ってゆう  
もんでねえ。教えて貰った訳じゃないですよ。ただその工場見に行っただけでねえ。  
これ、こう見てて、はあ、はあ、あんな事が有ってぐらいでねえ。

プレスでやっつた。それ見に行っただけでねえ。直接教えてはねえ。「こんなん、  
こうやって放り込んで、こうやって、こうやりやいいだ」って。「ああ、ほうかね  
え」って見取ってねえ。「ちょっとやって見るかね」ってゆうもんだねえ。まあ、下  
手にやって型壊すといかんでねえ。「まあ、いいわ」ってゆってさあ。そいで帰って  
来てねえ。そいから、あの、すぐに鉄工所で作らしてさあ。ほいで見た通りにやっ  
たらできるっすもんね。素人でも。

えー、だからプレスで造る、鬼をプレスで造るのは簡単ですよ。誰でもやれますわ。えー、半日有れば。全然知らん人がね、半日で「こうやってやれ」って言えばね。誰でもやれますね。だから、あのお、増えたんでしょねえ。鬼板屋さんが。

ほんと楽ですよ。まあ、土管造るより楽ですね。

鬼瓦を作るには長い修行を経て初めて身に付ける鬼板師の技術が必要である。しかし、明が言明しているように、当時既に、素人でも翌日から鬼瓦が造れるようになっていたのであった。しかも明の友人、岩角の言葉は当たっていたのである。

で、実際120本なったですね。それから150本になり、200本。200本以上なったですよ。その全盛は。だから僕はまあ、寝ても寝ても、造っても造ってもねえ、下手糞な鬼でも、いくらでも売れてくですよねえ。だから土管やってた頃のまるっきり反対でねえ。「こんなに儲かっちゃていいのかな」ってなあねえ、そんな気がしたですね。

だから親父がした借金もねえ、三年目ぐらいで全部返したもんねえ。土管の頃に何年か借金してねえ。またしちや、帰ってきた。碧信用（碧南信用金庫）やら岡信（岡崎信用金庫）やら、借りた金をねえ。

このようにして、萩原製陶所は土管屋から鬼板屋に実にタイミングよく転身したのである。しかし、鬼板屋とはいえ、プレス機械による鬼板屋であり、もし萩原製陶所がこのレベルで止まっていたなら、この『鬼師の世界』では紹介しなかった筈である。ところが、明の次の世代で萩原製陶所はさらに変容したのであった。

### 3) 萩原製陶所三代目一白地

明の鬼板屋を直接継いだのは明の息子の慶二である。慶二は昭和23年9月19日に生まれている。戦前の華やかな萩原製陶所とは無縁であるとはいえ、戦後の土管屋の時代を身をもって体験している。その独特の粘土感覚について慶二は語ってくれた。

生まれた時から、土管屋だったもんだから、その、粘土みたいな物には物凄く慣れちゃってて、もう、あの、こー、普通、普通の人だと、あの、何て言うかな、あの、粘土なんか見ると、あのー、こー、汚いっていう、そういうちょっと、こー、取っ付きにくいみたいな、そう言う所が有って、そう言う、そう言うところは、私たちはもう始めからそういう粘土で育って、育ってるもんだから、普通の、あのー、ご飯食べ

ると一緒みたいな、そういう感じで、こう、親近感は持っていますよ。

小っちゃい頃から、もお、とにかく、もう、いつもその、粘土のねえ、あの一、粘土をこー、仕入れるでしょ。仕入れる場所が、こー、あの広い所が在るんだけどね。昔は其処にあったんだけど、あの一、そう言う所にねえ、あの一、水なんかこう溜まっちゃたりするとね、あの一、雨降ったりなんかして。そういう処をプール代わりにして、夏なんか泳いでいたり、そういう生活だもんだから。あの一、始めから、も一、殆んど粘土漬けで…、育ってましたよ。

他の人たちから見ると、本当に、あの一、粘土が、その、あの、こういう所がこう汚くなっちゃうもんだから、嫌がれる人が沢山いるんだけど、そういう感じ全然無い。

慶二の説を聞いていると、人はここまで土と馴染み込めるのかと思えるぐらい、通常の人の感覚を超えた世界があることを垣間見るのである。或いは逆に人間はもともと土と相性がとても良く、ただ普通の人はそれを知らないか、または忘れているのかもしれない。事実、子供は粘土遊びや泥遊びが大好きである。慶二はこの感覚をさらに発展させていく。

始めから家<sup>うち</sup>、土管屋だったもんだから、そういう、あの一、手伝いからあれから、もう全部、あの一、遣<sup>や</sup>らされたもんで。

遊びも手伝いも、もう一緒みたいなもの。あの、体が凄く、あの、そ、他の人にね、あの、聞くと、ど、どうも「体が粘土くさい」。そのお、「そういう匂いがする」みたいなことも言われた事もあるですよ。あの一、「体からそういう物が漂っている」、そうです。最近はお酒ばっか飲んどるから、お酒の匂いが漂ってるみたいです。本当は、本当は、ち、違うのよ。あの一、こ一、顔見ても分かると思うんだけど、こ一、ちょっと、あの一、粘土っぽいでしょ。こ一、こ一、白くて、こういう、こ一、粘土焼けっていうのがあんだよ。

こ一、照り返しがあるのね。あの、こういう粘土ばかり見ていると、その照り返しで、そういう、あの一、肌になりますよ。

慶二は18歳になるまで手伝いという形で土管屋の仕事に携わっている。戦前、社長（または大将）と工場長との間にはっきりと一線があり大将は全く土管作りにはタッチしな

かったことを思うと天と地ほどの差である。そして、18歳の時に萩原製陶所は土管屋から鬼板屋に変わったのであった。慶二は新しくなった萩原製陶所で最初から鬼瓦の機械生産に携わって来たのである。つまり慶二は萩原製陶所生え抜きのプレス機械専門職人として今日まで来ていることになる。ここに慶二のプレス機械に対する独特なこだわりが始まった。

ずっと手作り鬼板師に話を集中させて来たので、プレス機械の話をいきなりここへ挿入することは場違いな感じはする。しかし、逆に両者の違いが明白になり、手作り鬼瓦とは何なのかがより鮮明になり「鬼師の世界」の理解が進むはずである。

確かにプレス機械さえあれば、一日操作の仕方を習えば、次の日から鬼瓦を造ることができる。しかし、その鬼瓦の型である金型はやはり原型から起こして作らなくてはならず、ここに手作りの鬼板師の協力が必要となる。プレス機械職人と手作りの鬼板師の間にある種の関係が生まれるのである。特に萩原製陶所の場合は、プレス機械による生産が丁度始まった頃だったので、なおのこと、直接鬼板師に原型の注文をする必要があったのである。プレス機械がより軌道に乗って普及し始めると、金型を鑄込む金型屋が様々な型を保有するようになり、直接金型屋から金型を手に入れる事も可能になってくるのだが。その<sup>あたり</sup>の事を慶二はこう語っている。

私のところが初めて作った金型とかさ、そういうのは、あの一、今でも有る。そういう、そういうのを作る時は、あの一、こう、最初の原型は、自分で作らなきゃいかんもんねえ。そういうのは、あの一、大変。うんで、その、さっき言った様な、その師匠（鬼板師）のところへ頼みに行ったり、何かして、「こういうのをちょっと作りたいんだけど」って言って、「それを作っても絶対売れないから止めなさい」みたいな事はしょっちゅう言われたよ。（笑い）

次に「プレス」と「手作り」の基本的な違いについて話してくれた。プレスの職人からの手作りとの比較である。

腕の良い人で手作りでやっていると、一日にねえ、本当に簡単なものでも30個くらいしか出来ないの。どれだけ頑張っても。だけど金型にすると、一日200とか300とかっていう、その、10倍くらい出来ちゃうの。簡単に出来ちゃうの。

出来てくる物がさ、あの一、手作りの人がよく言うんだけど、あの一、「わたしたちが作る手作りで、きちっと磨いて作るあれよりも、あの一、金型で出来て来るやつが綺麗だ」という事があるんだわ。（笑い）

もう死んじゃった私達の師匠だった人（杉浦五一）がそういう風に言ってたもんで。あの、あの、そういう面で、あの、機械生産に対する、あの、恐怖感みたいなものが、手で作っている人たちには多分在ったんだろうと思うんだけどね。僕ら、見てもそうなんだけど、今、あの、造ってるやつでも、あの、鬼の顔して、してんだけと、ツルツルでしょ。あの、表面が。手で作ってるとね、出来ないんすよ。磨いても、磨いても。プレスにしちゃうと呆気なくそういう形がぱっと出来ちゃう。（第2図参照）

慶二はプレス欠点も指摘している。

でも、あの、「違う製品を作れ」って言った場合はだめね。そういう所は、あの、私達は、あの、金型で造ってる人は沢山できるけども、でも、そういう、新しい想像力なくなるね。無くなって来ちゃうね。

慶二はさらに細かい事までも話してくれた。其れによるとプレス機械は現場での問題解決型によって進歩して来ているのであった。面白いのは解決法が見つかり同業者に直ぐに



第2図

手動プレスによるでき上がったばかりの鬼面 萩原慶二作



その事が広がってしまう事である。なぜ直ぐに広がってしまうのか不思議だったので、慶二に尋ねてみた。すると手作りの鬼板師がいつも口にしていた事と同じような言葉が計らずも慶二の口から返って来たのであった。

だってね、あの一、同業者のあれだっても、見るだけで、わか、分かっちゃうもね。

慶二は「見るだけで、違いが直ぐに分かる」というのである。決して、腰を据えてじっくりと検査するのではないのである。

分かっちゃう。大体、私達の、ぎょう、業界で、とにかく習うんじゃないで、見て、見て、とにかく、あの一、お、覚えちゃいなさいっていう事なんだよね。

このとき、余りにも手作りの鬼板師の言う事と似ているので、「プレス機械でも同じなのですか」とズバリ聞いたのである。

まあ、あの一、特殊な、本人だけしか知らないようなノウハウは在るかもしれない。うん。でも、でも、大体、こ一、見て、うーん、見ながら全部見て、覚えちゃうっていうのかね。

つまり、プレス機械も手作りも同じ技術習得上の基本的な伝統はシェアしている事になる。それは「見て覚える」または「見て盗む」という事である。ここでどうやって「見る」のかが問題になる。その見方について尋ねてみると、慶二は次のように答えたのである。

僕らなんかは、あの一、配達に行ったりなんかした時に、あの一、同業者のところに品物を、あの一、貰いに行ったりするでしょ。そういう時に、あの一、ちょっと、ちょっとだけ、こ一、あの一、仕事場かな、そういう所には、こ一、入ったりするもんだから、まあ、変な言い方なんだけど、まあ、あの一、様子を見て、まあ、あの一、盗んじゃうって言っちゃ可笑しいんだけど、そう言う事だよ。

「その僅かな間に目に入るんですか」と聞くと、何と、次のように慶二は言うのであった。

目に入るも、私なんか、こう、プレスの音聞くだけで、あー！この人こういう感じのプレスやっとなねって、そうゆうの分かるよ。普通に、こ一、音聞いただけでも分かる。

明は自分で疑問を持って音と粘土とプレスとの関係をとて細かく、注意深く観察して来ており、プレスの音だけで作業がどういった状況なのかが分かるレベルまでに到達しているのである。これは一日あれば鬼瓦が出来るといったレベルとは全然違う境地である。

こう、押すでしょ、上型から。んで、押して、こういう所に、皺が入ったり、こう、空気が入ったりするでしょ。そういう、そういう音がするでしょ。そういう音がするんだもん、あの一、プレスの音で。だから、も一、あの一、私達みたいなのが仕事場に来られるの、随分、迷惑な話なんじゃないかなと思うよ。同業者同士ではね。「うーん、あそこ、あ、あれ、駄目だよ」。「あれ、あそこ、あの一、あの部分が悪いから直した方が良い」とかさ。そういうの分かるもん。

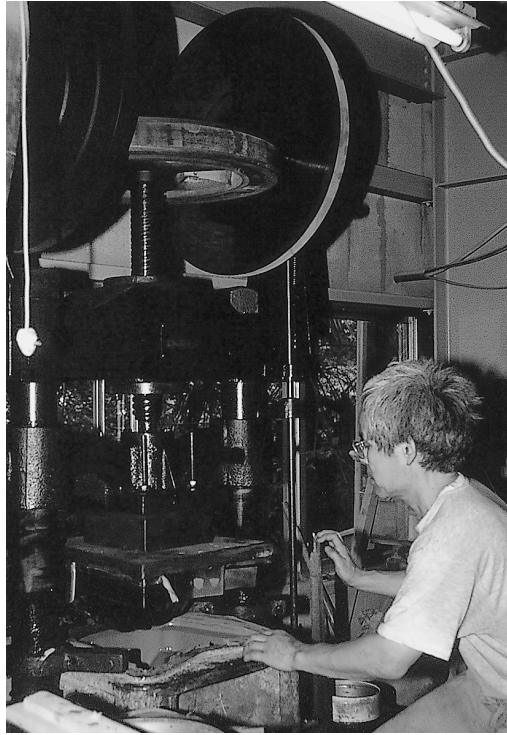
本当、分かる。あの一、プレスの音でさ、あの一、どういう品物が出てくるかが分かる。全然見えないんだけど、音、音で分かるのよ。

そりゃもう、自分がやってて、んで、あの一、他の人がやってるのを見て、「あ、あの人、まだ、まだプレスが1年かやってないな一」とかさ。直ぐ分かっちゃう。品物見れば、もう、一目瞭然。「あ、これ、だ、駄目だ、これは」。そういうの、分かる。

慶二の話を聴いていると、一般にプレス機械を使うと、ほぼ同じものが出来ると思うのだが、プレス機械を操作する人の技量によってかなりの良し悪しが出る事になる。慶二の父、明は「プレスは一日習えば翌日から誰でもやれる」というが、これは事実でもあり同時に言葉の綾でもある。やはり事実はプレスの熟練工と初心者の間にはかなりの開きがあると言えよう。(第3図参照)

慶二がなぜこういった能力を身につけたのか説明してくれた。それはやはり手作りの鬼板師たちと新参者であるプレス機械工たちとの葛藤が心理的なコンプレックスとして影を投げ掛けているのであった。このコンプレックスをバネに慶二はプレス機械の出す様々な音の世界を構築したのである。

手作りの職人の人たちってね、あの一、物凄く丁寧な仕事をしてたもんだから、んで、それに近づけるために、もう、あの一、機械生産でやってる人、人達は、もう、「これよりも劣るような品物で商売しようなんてのはおかしい」って言われたのを…。散々叩かれてるんだもん。



第3図  
第三代目 萩原慶二  
手動プレスを操作中

「あなたたち（手作り職人）よりは、早くて、絶対良いものを造りたい」って言う、あの一、気持ちはどっかにあるよね。

慶二はこの手動プレス機械を使って「早く、いいものを作る技術」とパチンコ屋で「パチンコを打つ技術」との間に、ある似かよいが在ることを指摘する。

パチンコ、やってる時に、もう、そろそろ、その一、777とこういう風に揃う、あの一、あれが来るみたいな、そういうおかしな勘みたいなものが、僕らの仕事の中で、そういうとんでもない他に分かんない、あの一、勘が付いちゃって。

その勘と言うのは、慶二に言わせると、独特なプレスのレバー感覚から来るものなのであった。

あの一、レバー握ってるでしょ。あの、レバー握ってる時のそのタイミングと、あれなんかは、あの一、音とその一、プレスの感じと、あれは、も一、び、微妙なもんだから。

毎回違うんだけど、毎回違うんだけど、どの程度だったら O.K. みたいな、そういう線は、あの一、押さえてやってますけどね。だから、あの一、他の所でプレスやっている人の、あの一、機械だけで、あの、自動的にやる機械ね、あの一、あの音聞いても、「あ、あれ、もう駄目、今、あのプレスは駄目みたい」な、そういうのはありますよ、だけど。(笑い)

慶二は何と全自動のプレス機械さえも瓦や機械の調子の良し悪しをその音でもって聞き分けるのである。

自動でも分かる。だで、この自動は、誰が調節したのか知らないけども、「今のプレスは、もお一、駄目、良い品物出て来ない」って、そういう、そういうのが分かるんですよ。だで、あの一、お、音が全然違うもんだから。あれ、手で、あの、こういう手作りの職人さんと一緒に、手造りのプレスみたいなものがありますよ。

そして慶二は丁度、「手作り職人による鬼瓦」と「プレスによる鬼瓦」が違うように「手動であるプレス」と、「自動によるプレス」にもはっきりと違いがあるというのである。

最近は、も一、全部自動になっちゃったもんだから、人間いなくて、勝手に、こう一、プレスしてんだけど。だけど、僕、今、向こうでやってたのは、手でやってたでしょう。あれと、自動のプレスとは、もう一、全然違うからね。

凄く下手、下手くそ。自動、下手くそ。まだまだ、私達の、私達の間感じゃ、とてもついて来てない。自動だからさ、人間が、一人ね、あの、減るとかそういう、省力化出来るから、それで使ってるだけで。全体的にみたら、手造りの、手造りのプレスの人の方が。その、全然違う。

そして慶二ははっきりと次のように宣言する。

僕ら、ど、どっちかって言うと、手作り職人じゃなくて、手造りの、あれ、プレス職人って、そういう風に言っても良いのかなっていう気もするけどね。

慶二はもう一度、その独特なプレス機械に対する感覚をコンピューターにたとえて説明してくれた。それほどまでに手造りプレス職人として技術と勘を日々の作業の中から高めて

来ているのだ。

だで、本当に事細かく分かっちゃうの。だって、四六時中付き合うでしょ。だで、だんだん、プレスの方が私に似て来るみたいな所があるんだよね、きっと。あの一、コンピューターでもそうじゃない。あの、自分が、あの一、打ち込んだ分だけ応えてくれるっていう。打ち込まない事には何も応えてくれないみたいな。一緒ですよ。だから、どれだけ、この人が、あの一、プレスと付き合ってるのかなーみたいなのは、本当、他所に行くと直ぐ分かる。

しかも慶二はなぜ、自動プレスが手動プレスに比べて良くないのかをしっかりと見抜いているのであった。本質を突いた鋭い指摘である。

僕から言わせると、作る人がさ、ただ、その、あの一、機械的なことは凄く知っているけど、実際に作った事、無いもんだから、分かんないんだよね。僕らみたいな、あの、手造りプレス盤みたいなのは。分かっちゃうね、変な話だけど。

だから、使う人が自動プレスを細かく調整するのだという。しかし、可能な動きが手動プレスに比べて限られているので、調整が完全には出来ないのである。それ故、次のような事態になる。

どうしても重要な、ここの得意先は絶対に、あの一、守んなきゃならない、その製品の状態っていうのが有るでしょ。そういう場合は、あの一、手で造りますよ。手のプレスで造るっていうかね。

つまり、プレス鬼瓦は決して出来上がりが一律ではなく、プレス工場に、手動のプレスと自動のプレスがあり、こういった事を知っている工場では、手動と自動を注文によって使い分けているのである。

プレス機械から出来る品物は品質が同じだと一般に考えられがちだが、実際は毎回、プレスするたびに違うのだと慶二は言う。その違いをコントロールできるのが、実は自動ではなく手動なのだと言っている。それを支えるのが長年の経験から来る技術と勘なのである。

毎回毎回、こー、品物が、ち、違うんだよ。こー、出て来るのがね。毎回違うもんだから、んで、もう、それ、あの、一々上げて、こうやって見るんだけど、その、自分

のその手の感覚と、それから、こー、出て来る感じと。でも、あの一、やっぱり、あの一、音が一番、あの、正直に出るなーって言う、うん、気が付いたんだけどね。

慶二は手動プレス機械で造る鬼瓦に、ある意味、<sup>は</sup>填まっており、鬼瓦のプレスの職人として自信と誇りを持っている。そしてそれは、「手造りの」プレス鬼瓦へのひた向きなこだわりなのである。

どこかで、あの、手作りみたいな所がないとっていう、そういうこだわりが有るね、だけど。うん、全部機械だと、もう一、カラカラに成っちゃうもんだから。全部、機械の生産にすると、最初の段階は面白いですよ。こういう風にするっていう。だけど、その後ずっと維持するのはとても面白くない。

## 参考文献

- 石田高子 1983年 『葦のうた』愛知県陶器瓦工業組合。  
 駒井鋼之助 1963年 『粘土瓦読本』彰国社。  
 三州鬼瓦製造組合・三州鬼瓦白地製造組合 2000年 『三州鬼瓦総合カタログ2000年度版』三州鬼瓦製造組合・三州白地製造組合。  
 吹田市立博物館 1997年 『達磨窯』吹田市立博物館。  
 杉浦茂春編 1982年 『高浜市誌資料(六)』高浜市。  
 高浜市伝統文化伝承推進事業実行委員会編 2003年 『鬼瓦をつくる～愛知県高浜市の三州瓦～』高浜市伝統文化伝承推進実行委員会。  
 高原隆 2002年 「鬼師の世界——三州鬼瓦の伝統と変遷」『文明21』第9号：227-247。  
 \_\_\_\_\_ 2003年 「鬼師の世界——黒地：山本吉兵衛(1)」『文明21』第10号：163-189。  
 \_\_\_\_\_ 2003年 「鬼師の世界——黒地：山本吉兵衛(2)」『文明21』第11号：81-132。  
 \_\_\_\_\_ 2004年 「鬼師の世界——黒地：神谷春義・岩月仙太郎系(1)」『文明21』第12号：113-165。  
 \_\_\_\_\_ 2004年 「鬼師の世界——黒地：神谷春義・岩月仙太郎系(2)」『文明21』第13号：155-175。  
 \_\_\_\_\_ 2005年 「鬼師の世界——黒地：神谷春義・岩月仙太郎系(3)」『文明21』第14号：97-111。  
 \_\_\_\_\_ 2005年 「鬼師の世界——黒地：山本鬼瓦系(1)」『文明21』第15号：183-208。  
 \_\_\_\_\_ 2006年 「鬼師の世界——黒地：山本鬼瓦系(2)」『文明21』第16号：93-116。  
 \_\_\_\_\_ 2007年 「鬼師の世界——黒地：丸市、(杉荘)、萩原製陶所(1)」『文明21』第19号：55-72。  
 ONIX 1992年 『鬼瓦総合カタログ』ONIX。